

大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬 萊 む し の 会
第18号 2025.9.10

医王山ゼフィルス採集記

上田 諒太

6月29日、石川県金沢市と富山県南砺市に跨る医王山へと出かけた。目的はもちろんこの山に生息するゼフィルスの採集である。大きな目標はヒサマツミドリシジミとフジミドリシジミであった。

遡ること一週間前、大原でのオオムラサキ放蝶会の後、私の恩師である小松先生と杉峠へヒサマツの採集へ出かけた。ここのヒサマツは由緒正しく有名な産地のものでありながら個体密度が但馬の三川山などより薄く、またテリトリーを張る位置も高いため採集は容易ではない。この日の結果は3個体目撃し、先生が1個体を採集したのみであった。

帰路、自分の三角紙に収めぬまま今シーズンを終える訳にはいかないと、私の胸中で蝶屋としての闘志が湧き立った。ということで、以前より行ってみたかった医王山で再度ヒサマツに挑む決意をしたのである。

実家がある京都からは4時間ほど。北陸道を北上し、ポイントへの到着は朝6時頃であった。アクセスは金沢市内を南東へ抜けて南砺市側からであり、麓にイオックス・アローザというヨーロッパをモチーフにしたリゾート施設がある。ここのゲレンデを左に見て医王山に続く林道を上がっていく。山頂カフェなる喫茶店が見えてきたあたりで林道にチェーンが張られていたため、この先の夕霧峠（写真1）までは車で行けそうになく、ここから先は歩いていく必要があった。まあ、叩き出しをしながら気長に上まで上がろう。期待を込めて長竿を伸ばし道沿いのミズナラやマンサクを叩きつつ歩くが、夕霧峠までの徒歩20分ほどの区間ではゼフの出現はなかった。

夕霧峠まで登りきると、ここから南北に道が分かれる。北へ行くと白兀山ヒュッテ～六角堂の有名ポイントがあり、南へ行くと登山道の先に奥医王山山頂がある。

ここ医王山はフジミドリシジミが採集できることでも知られているらしく、これもまたヒサマツに次ぐ目標であった。山頂へ続く登山道は、ちょうどブナ林の奥へと延びている。わくわくしたので、こっちを進む



写真1 夕霧峠からの眺望（南砺市方面）

ことにした。

斜面を上がるとすぐに稜線に出た。植生はやはりブナ主体のウリハダカエデ、ミズナラ、マンサク、ミヤマカワラハンノキ等が混ざる落葉広葉樹林で山地棲ゼフには非常に良さげな環境であった。

この時点で7時前。途中の日が当たるオープンスペースで何やら小さい蝶が鈍い緑色の光沢を輝かせながら高速で飛び交っていた。この時間帯のテリ張り。オオミドリシジミであった。手前の低木の葉上に止まった個体をすかさずネットイン（写真2）。少し擦れているが欠けのない綺麗なひでであった。三角紙に収納しもう一度周囲を見渡すとまだまだ複数が卍^{*}していた。蝶を長く採集している人なら誰もが共感できるであろう壮観さであった。

これらに見とれながらふと思い出す。「肝心のフジがない、、、」三川山では、早朝に地面に降りていると聞く。それに期待し下も気にして歩くが、地面にいた目ぼしい虫といえば、マガタマハンミョウくらいであった。その後も開けた場所があれば決まってオオミドリシジミが乱舞していた。

1時間ほど歩くと奥医王山の山頂に辿り着いた(写真3)。ここからさらに道が分岐している。稜線を行く道と下る道、前者を進んだ。相変わらずオオミドリシジミが沢山飛び交っていた。フジを気にして視線を下げるとカンアオイが林床のあちこちに大きな群落を形成していた。ここは北陸、きっとギフチョウも多産しているのだろう、来年のギフはここに来よう。そんなことも考えつつ歩いていると、時刻はそろそろアイノミドリシジミがテリを張る時間を示していたので、通り過ぎた場所でテリを張りそうだと目星を付けていたオープンスペースへ戻ることにした。が、その道中のスギ植林内でオオミドリとは違うゼフ2個体が私の胸くらいの高さで卍しているのが視界に入った。これらをネットインすると、アイノであった。こんな薄暗い環境でもテリを張るのかと驚きながら、眩いばかりの輝きをしばし眺め、三角紙に収納した。その後アイノの追加はなく、オオミドリの姿



写真2 オオミドリシジミ



写真3 奥医王山山頂

も見えなくなった。登山道を何度か往復するもゼフはいずれの種類も出現しなかった。

山頂ですれ違った登山客のおじさんが、六角堂付近で網を持った人が毎年何人か来ているので行ってみてはと話してくれたので、そちらへ移動することにした。このとき、ミドリヒョウモンやツマグロヒョウモン、キタテハ、キアゲハなどが多数飛び交っていた。

夕霧峠手前でブナを叩くと、ここでやっとフジが1個体採集できた。今までどこにおったんや！！！！この時点で昼過ぎ。六角堂付近でヒサマツを狙うことにした。

車も走れるくらい綺麗に舗装された尾根道を、ゼフがテリを張っていないか気にしながら歩く。10分ほど歩いたところで、地面すれすれをゼフが2個体、亘っていた。「ん？ジョウザン？？とりあえず採っとくか。」と何気なしにネ

ットを振って入ったその2個体は、なんと両方ヒサマツであった(写真4)。達成感と共にとっても爽快な気分ネットでの中に手を伸ばした。

そのとき、向こうから家族連れが私の大きな捕虫網に興味を持ったようで、何を採っているんですかと話しかけてくれた。有頂天な私は自慢げに採ったヒサマツを手に乗せて差出し、「うわぁ〜〜〜見て！めっちゃ綺麗！！！」という期待通りの反応への快感からさらに図にのり、次はアイノとフジを見せた。その後の反応たるや、こちらも見せ甲斐のあるものであった。

お互いニコニコして歩き去るのを見送り、気を取り直して上を見上げると、左にヒサマツ、右にエゾミドリシジミがそれぞれテリを張っていた。これらを採ったところで、後が続かなくなり、場所を少し移動して様子を見ても何も飛ばず、時間も15時近くになっていたので採集を切り上げることにした。

一種あたりの個体数は多くなかったが、5種類のゼフィルスを確認できた。アカシジミやウスイロオナガシジミなどが今回見られなかったが、再度訪れた時には確認できるかもしれない。

以下、確認した蝶類を列举する。

キアゲハ 10頭、カラスアゲハ 2頭、ミヤマカラスアゲハ 4頭、モンシロチョウ 10頭
スジグロシロチョウ 5頭、ルリシジミ 20頭、オオミドリシジミ 10♂
エゾミドリシジミ 2♂、フジミドリシジミ 1♂、アイノミドリシジミ 2♂
ヒサマツミドリシジミ 3♂、ダイミョウセセリ 3頭、ミドリヒョウモン 8♂2♀
クロヒカゲ 5頭、ヒメキマダラヒカゲ 5頭、ヤマキマダラヒカゲ 5頭

＊) 「亘」とは：亘巴(まんじともえ)飛翔のこと。ミドリシジミの仲間(ゼフィルス)には、縄張りを持っているオスとその縄張りに侵入してきたオスとの間で、空中で組んずほぐれづの相互回転を伴うバトルが生じる種があり、そのありさまを表現した言葉(编者注)



写真4 ヒサマツミドリシジミ

ドングリ園はチョウの楽園

藤野 適宏

ドングリ園は京都市左京区大原草生町の高野川右岸にある面積5,000 m²ほどの雑木林です(図1)。オオムラサキが飛来するようになると、ここに京都大原学院の児童生徒がクヌギの苗を植えたのが2010年の春でした。それから15年、間伐や剪定を繰り返して素敵なドングリ園が出来上がりました(図2)。因みにこの雑木林をドングリ園と命名したのは学校の先生方でした。

ここに生えている木はクヌギだけではありません。アベマキとエノキが混じっています。これは植栽時に何かの手違いで紛れ込んだものなのですが、今となってはより本来の大原の自然に近似したものになったと喜んでいます。

このドングリ園でのオオムラサキの初飛来の記録は2015年6月30日でした。それ以降、少しずつ飛来数が増えて、今年はより一層その美しい姿を写真に収めることができる機会が多くなりました(図3)。それにはちょっとした工夫が功を奏しています。毎年、初夏になると、樹液を出させるための傷口を幹の胸高ぐらいに刻んでいるからです。

2025年8月19日午前、思い立って私たち夫婦と二人の小学生の孫とでドングリ園を訪れました。ドングリ園にいる昆虫を記録しようと思ったのです。そして思っていたよりも多くのチョウに出会えたのでお知らせします。

記録したチョウはキタキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ムラサキシジミ、ツマグロヒョウモン、コミスジ、キタテハ、ルリタテハ、アカタテハ、ゴマダラチョウ、クロヒカゲ、サトキマダラヒカゲ、ヒメジャノメ、クロコノマチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヒメキマダラセセリの合計16種でした(一部の方に20種と伝えたのは過大報告でした)。

調査時間は午前10時から11時までのわずか1時間だったので、密度の高い各種チョウとの出会いでした。このうち太字で示した7種(約44%)は樹液を好む種ですので、ドングリ園の特徴をよく示しているといえます。一方で残りの9種はあまり樹液に依存しない種だということになり、この場所の環境の多様性がうかがえます。そのような種が多く住みつける要因は何

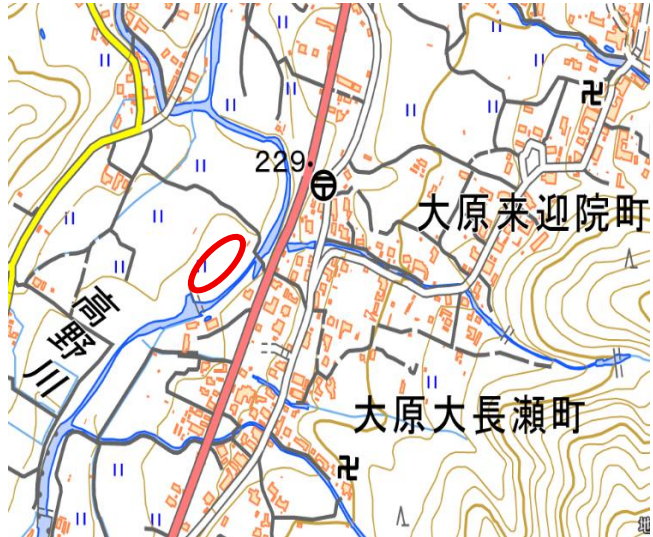


図1 ドングリ園の位置(赤線で囲った部分)



図2 ドングリ園 2025.6.30



図3 クヌギに飛来したオオムラサキ 2025. 7. 11 図4 クヌギに飛来した昆虫たち 2025. 8. 19

かと考えてみました。ドングリ園を歩いてみて気づくのは、草刈りの頻度が高くなく生えるに任せた草本類、そしてクヌギなどが作り出す木陰です。わずか 5,000 m²の土地ですが、これらが多く種のチョウが住みつける多様な環境を作り出していたと考えてもいいようです。

このような環境は大原広しといえど見出すことは難しく、希少で貴重といえるでしょう。大原の自然を大切にすることを標榜している私たちは、半ば人工的な環境ではありますが、このドングリ園に注目し、より一層チョウの多様性を維持するように工夫を重ねていきたいものです。またこの調査時、チョウ以外にアキアカネ、ハグロトンボ、カブトムシ、シロテンハナムグリ、クロカナブン、ノコギリクワガタ、オオクシヒゲコメツキを記録しています(図4参照)。これもドングリ園の自然の豊かさを示すよい指標でしょう。定期的な調査と計画的な剪定・除草が望まれます。

つのがないオオムラサキの幼虫頭殻

大原のオオムラサキを守る会

はじめに

春に目覚めたオオムラサキの越冬幼虫は、地表から再び食樹に戻り、摂食して3回の脱皮を重ねて蛹になる。従来大原の飼育網室における観察では、越冬幼虫になるのは4齢であると判断していたが、一昨年、5齢でもそれが生じる可能性が指摘された¹⁾。それを明らかにするために、冬季休眠が明けてのち、次の齢への脱皮のときに落下する古い齢の頭殻を拾い集めて、その大きさを測定することにした。参加会員による頭殻の収集は、2025年4月23日、同5月7日、同5月14日、同5月21日に行った。このうち、5月7日は188個の頭殻を収集したが、この中には、越冬幼虫から



図1 2種類の頭殻(右:A、左:B)

終齢前幼虫になるための脱皮時の頭殻 (A) が 100 個、終齢前幼虫から終齢幼虫になるための脱皮時の頭殻 (B) が 88 個あった。A と B は大きさ、形状、色が異なるので、その差異は顕著である (図 1)。共通点はどちらもつの (角状突起) があることである。

角状突起がない頭殻を発見して驚く

これらの頭殻は逐一、1/10mm 目盛りの定規上に置いて写真撮影し (使用機種：オリンパス stylusTG-4)、データをパソコンで拡大投影してその幅を測定していった。この撮影の過程で頭に角状突起がない頭殻を発見した (図 2)。頭殻収集の過程で他の鱗翅目幼虫の頭殻が紛れ込むことがあり、今回もそれを疑ったが、角状突起以外の微小な突起の形状や数は角状突起がある頭殻と変わることがないので、見た目は大きく異なるが、これもオオムラサキの頭殻と判断した。

4 回の調査における頭殻収集数の合計は 463 で、角状突起がないサンプルはこれのみであった。非常にまれな例と考えて、8 月 27 日の定例活動日に参集した会員間でその画像を共有し、それが生じる原因を考えた。この時点では、遺伝子に突然変異が生じた可能性を考えるほかはなかった。



図 2 右：角状突起がない頭殻、左：正常な頭殻

頭殻に 2 つの穴を見つけて再度驚く

珍しくはあるが微小なサイズなので、記録に残さないと我々自身が忘れ去ってしまうと考えて、報告書を作成すべく再度当該の頭殻の写真撮影を試みた。これまでの撮影では、サイズ計測が容易にできるように、図 2 のように頭殻を裏返して撮影していたが、今回は表に向けて撮影することにした。それによって重大な見落としをしていたことに気付いた。頭殻に 1 対の穴が開いていたのだ (図 3)。その位置は角状突起が生えていた場所に他ならないと判断できた。これから推理できることは、元々角状突起が生えていなかったのではなく、本来生えていた角状突起が何らかの原因で抜け落ちてしまったということである。



図 3 右：1 対の穴が見つかった頭殻、左：正常な頭殻

なぜ抜け落ちたのか、抜け落ちてどこへ行ったのか。閃いたのは幼虫の頭部をもつ成虫の存在との関連性である。以前、これに関して的場さんから報文「幼虫の頭部をもつ国蝶オオムラサキ その驚愕の形態を追う」(松本正吾著)の存在を教えていただいた。松本氏は多くの文献に当たり、“幼若ホルモンレベルでの変調に起因した脱皮不全”の可能性を示唆された²⁾。今回の場合も、突然変異に関わる問題ではなく脱皮不全なのであろうと推測した。脱皮不全なら、

本来頭殻にあるべき角状突起は、脱皮した幼虫にそのまま付いている可能性が高い。脱落すべき古い角状突起を付けたままの幼虫はその後どうなったのか。今となっては推測しようもないが、この夏のうだる暑さの中で、昆虫の深いミステリアスな世界に一刻嵌まり込ませてくれたこの頭殻に感謝である。

引用文献

- 1) 大原のオオムラサキを守る会：大原のオオムラサキは何齢で越冬するのか、大原の里と比良の山 5、3-4、2024
- 2) 松本正吾：幼虫の頭部をもつ国蝶オオムラサキ その驚愕の形態の謎を追う、化学と生物 59 (4)、182 - 190、2021

(文責 藤野適宏)

<8 月おもな活動の報告>

◆8 月 6 日 (水) 10:00～ (報告者：奥谷)

○参加者 藤野、木村、的場、大友、村上、奥谷、計 6 名

○活動内容

- ・ 会議 ①里トラ代表久保様に 6 月㍻で活動報告等を小松さんより提出
②セブンイレブンの広報誌に活動レポートを提出する
③給餌；本日で終了、成虫は放蝶する
④ヒトデガードの紹介 ⑤本日の活動内容
- ・ 作業 ①成虫の管理；♂1 頭放蝶、給餌 ②幼虫の確認；3 齢幼虫確認
③フジバカマ園に散水 ④フジバカマ園内外の除草
⑤ヒトデガートの設置

◆8 月 16 日 (土) 10:10～14:00 (報告者：大友)

○参加者 大友、小松、藤野、的場、村上、計 5 名

○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆8 月 20 日 (水) 10:00～ (報告者：奥谷)

○参加者 藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計 7 名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
②物置；オオムラサキ用用具と栽培用具とに分けて 2 つの物置に収納する
③ドングリ園；多くの昆虫が飛来し、自然林となって来た一保護用の看板を設置する
④フジバカマ；シラギヌ病用殺菌剤を散布する
- ・ 作業 ①ルートセンサス ②幼虫の確認；4 齢 (?) の確認
③フジバカマ園内外の除草
④木村さんがアシナガバチに刺されたので成虫に殺虫剤を散布し巣を撤去
⑤網室外のエノキの剪定；チェン鋸、高切チェン鋸の試し切り

◆8 月 27 日 (水) 10:00～ (報告者：奥谷)

○参加者 小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計 8 名

○活動内容

- ・ 会議 ①本日の活動内容
②セブンイレブン助成金；活動レポート提出。標本箱、捕虫網、虫ピン、購入
③会報「大原の里と比良の山」の原稿募集 ④頭殻の調査；角のない頭殻を発見
- ・ 作業 ①ルートセンサス ②幼虫の確認
③新旧物置内の用具、備品の整理
新物置；栽培用具、剪定用具を収納
旧物置；オオムラサキ飼育用具、採集用具を収納
＊今後もこのように新旧物置に用具を分けて収納する

◆8月29日（金）10:00～14:00 （報告者：大友）

○参加者 大友、的場、小松、村上、藤野、計5名

○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

【あとがき】

気象庁は9月1日、今夏（6月～8月）の日本の平均気温が過去30年の平均値を2.36度上回り、1898年の統計開始以降で最も高かったと発表した（「読売新聞オンライン」より）。この夏の暑さを身をもって体験している私たちにはムベなるかなという数値である。しかし振り返えると、近年は毎年同じような思いを持って夏を過ごしてきたようにも思う。まさに地球温暖化を通り越して沸騰化の時代である。

この現象が大原の昆虫に影響を及ぼさないわけがないであろう。私たちの観察・調査においても、オオムラサキ幼虫の越冬が4齢から5齢へ移行していつている可能性の問題、アサギマダラの飛来ピークが後倒しになりつつあり、なおかつ飛来数が減少していつている問題もそれに該当すると考えられる。一方でこの事実は、彼らは生活様式を変化させることによって、この難局に対処しているということである。その対処の様式は毎年の地道な観察・調査から得られる。地球沸騰化は、我々が20年来行ってきたことの継続の重要性を改めて考えさせてくれている。（藤野）

＝ 目 次 ＝

医王山ゼフィルス採集記	1
ドングリ園はチョウの楽園	4
つのがないオオムラサキの幼虫頭殻	5
8月おもな活動の報告	7
あとがき・目次	8

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会 2025年9月10日 第18号

大原のオオムラサキを守る会 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬莱むしの会 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏